

# 経験をもとに原子力の功罪を教える。

原発推進、反対。  
どちらにも身を投じてきたからこそ、伝えられること。

理系の立場で社会貢献できる仕事をしたいと考えていた勝田先生は、大学の専攻に核融合を選んだ。原子力が夢のエネルギーといわれた時代のこと。原子力でエネルギー問題を解決し、世界を救うという思いから懸命に研究に取り組んだ。しかし、大学院へ進学する中で、自分のように原子力に肯定的な人ばかりではないことを知る。「原子力が世界を救う」のは本当だろうか？ そう疑問を持つようになり、学位取得後は180度立場の異なる反原発団体に入った。

団体での活動を通じて、教科書には載っていない現実を目の当たりにする。使用済み核燃料や分離プルトニウム処分の問題を深く知ったのもこのころだ。しかし、活動を続けるうちに、このままでは反対のためだけに仕事をするようになるのではと悩むようになる。推進／反対、どちらか一方の視点では正しい姿が見えないと知ったからこそ、両者を踏まえた仕事をしたかった。けれど、そんな仕事はなかなかない。海外にいた頃、明治大学が教員を募集していることを知る。両方の立場を知る自分だからこそ伝えられることがあるのではと思い、教壇に立つことを決めた。

現在は、経験をもとに原子力の功罪を教える。また、原子力の代替エネルギーが生む環境破壊の可能性、環境保護にからむ利権、宇宙開発と軍事産業の関係なども取り上げ、学生に科学技術・産業の持つ光と闇を伝えている。東日本大震災以降は精力的に海外に出向き、FUKUSHIMAで何が起こったかを世界に伝えていった。各国の研究者と協力し、20年、30年後まで福島事故の影響を追いかけていくプロジェクトも考えている。

勝田先生のように、原子力推進／反対双方の立場に身を置いた人は少ないだろう。そんな先生だからこそ、知り得た事実、得られた経験はたくさんある。貴重な知見をもとに、これからも先生は、原子力や原発をフラットな視点でとらえ、伝え続ける。



# 科学・技術

地震による建物の揺れや、鉄道架線の振動を抑えるためにできることはすべてやる。

「振動のことなら松岡」 そう言われるようになるのが、技術者を志したときからの目標だという松岡太一先生。地震による建造物の揺れを制御するためのダンパや、鉄道架線の振動を低減する技術の研究・開発に挑んでいる。そして30代半ばにして、目標は実現しつつある。

「国内外の学会などでいろいろな方と出会う機会が増え、ここ数年、様々な企業から“振動を止めてほしい”というオファーをいただくようになり、共同研究を行っています。その縁で鉄道関連の仕事にも参画することができたりして、鉄道好きにはたまりません」

実は松岡先生、もともとは振動の分野にそれほど興味はなかった。自動車・電車・飛行機などの乗り物が大好きで、明大の学部生時代、モノづくりを学ぶために入った研究室が、たまたま地震の制振装置の研究・開発を行っていたのだという。「当時のメンバーは私以外みんな優秀で“振動には興味ない”なんて言っている場合ではありませんでした。追いつけ追い越せでがむしゃらに取り組むうちに研究の面白さに夢中になっていったという感じです。しかもそこから発展し、今、好きだった乗り物の仕事に思いがけなく関わっていることは本当にありがたいと思います」

そう謙虚に振り返るが、地震の制振においても確かな実績を上げている。最近も建材メーカーと共同で、鉄板と振動吸収ゴムを一体化させた補強材の開発に成功。木造の戸建に取り付けることができるもので、ローコストでの耐震リフォームを可能にした。「東日本大震災のような巨大地震による揺れは、人類の英知を結集しても完全にはコントロールできません。建物の倒壊が避けられないのなら、揺れを抑えるのではなく受け流して、地震が起きてから避難するまでの時間を稼ぐことで安全に貢献したいと考えています」

単なるモノづくりではなく“人の役に立つ”モノづくり。松岡先生が幼い頃から一貫してもち続けている技術者魂は、日本復興を支える力になる。

松岡 太一 理工学部 機械情報工学科 専任講師／理工学部 精密工学科 1999年卒業

# 揺れる国の安全に制振技術で挑む

